老いを光らせるために

松永伍一

大和書房

老いを光らせるために

松永伍一

大和書房

松永伍一（まつなが・ごいち）

詩人・評論家。

一九三〇年福岡県生まれ。八女高校卒。一九五七年上京し、以後文筆生活。文学・民俗・美術・宗教などのユニークな評論で知られ、『日本農民詩史』全五巻により毎日出版文化賞特別賞を受ける。あらゆる文学組織に関係せず。海外取材二十数回、古代ガラスの蒐集が趣味。

著書は『日本の子守唄』『天正の虹』『日本人の別れ』『散歩学のすすめ』『花明りの路』『光の誘惑』など百余冊がある。

老いを光らせるために

一九九六年五月三〇日　第一刷発行

著者　松永伍一

発行者　大和謙二

発行所　大和書房

東京都文京区関口一-三三-四
〒一二二　電話〇三(三二〇三)七一一一
振替口座　〇〇一六〇-九-六四三七

印刷　三松堂印刷

製本　ナショナル製本

©1996 Goichi Matsunaga Printed in Japan

ISBN4-479-01089-0

目

次

I 人はかならず死ぬ

*

辞世の歌はどんな背景から詠まれたか 9
死者を見送るとき人の心は透明になる 26
藤原道長と一遍上人との臨終の迎え方 37
死ぬことと生きることとは一つの流れ 48
鷗外・光晴・宣長の遺書をどう読むか 58
遺書もときどき改訂されると深くなる 71

*

II 老いにも彩りがある

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「老いらくの恋」は羨ましい限りだが　85
詩の深井戸から老いのこだまを聴こう　99
老いたら狂歌のパロディがよく似合う　115
勲章や名誉を欲しがるのは老醜である　126
老いつつ永遠を測る物差しをもちたい　139

*

III　やり残してはいないか

健康を保つためにどんな工夫が要るか　153
百歳でも現役で生きられる人の気概は　168
孫に夢を托するときの温かい生き甲斐　181
養生して健康のありがたさに目ざめる　194

おしゃれすると心の中の少年が微笑む　206
子孫には財産より心の遺産を伝えよう　217
＊
あとがき　227

老いを光らせるために

装幀　スタジオ・ギヴ

I

人はかならず死ぬ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

辞世の歌はどんな背景から詠まれたか

人は生きているあいだに人格をつくり、他人と交わり、働らき、遊び、子孫をつくり、財を成したり成さなかったり、裏切ったり裏切られたり、愛したり別れたりして、そのあげくに死んでいく。

「もうやるべきことはすべてやり終えた」と退屈気味のところへ具合よく「お迎え」がきてくれればいいのだが、そううまくはいかない。

「やり残していることがまだたくさんある」状態のところへ死が直撃したら、死ぬにも死にきれないだろう。

霊能者のような人はいざ知らず、自分の死を予知する能力など一般にはないから、死が近づいたことを予感したとき、たいていの人はあわて、なにから手をつけていい

か頭が混乱してしまうし、意識が朦朧としてきたらなにもできずに別世界へ行ってしまう。

それを怖れてだれかになにかを言葉として伝えておこうとするのも人間らしい心理だ。死ねば死にっきりと開き直って「お迎え」に素直に従おうとする人は、遺す言葉などに苦慮しない。遺せば死にっきりにならないとの物差しがあるからだろう。

それに対して、外圧として死を与えられる人、たとえば切腹を命ぜられた人などは、死からのがれられるものならと切に願う。が、それを求めても無駄だと観念したとき、死に臨んでの心境を歌や詩の形にまとめて不特定多数の人に向けて遺す。それが辞世の歌である。

もちろんそんな外圧が加わったときだけではない。文才のある人は自分のもっていた思想のエッセンスを歌に托して後世に伝えてきたが、考えてみると、辞世の歌と遺言はニュアンスがちがうことがわかる。前者にはポーズが感じられる。

戦争中に特攻隊の若者たちが突撃前に辞世の歌を詠んだ。大君のために殉じますという内容のもので、かれらより少し年下の私たちもそれらの歌に刺激されて死ぬ覚悟を決めていた。殉死に類するこの若者の死は、病死とか老衰死とはちがって、見えない観念に従ったものである以上、自然な死からは遠かった。

そこで言挙(ことあげ)された辞世の歌も「私」を消し「公」のためにとの大義名分がバックにあり、インパクトもあった。「滅私奉公」とか「尽忠報国」とかのスローガンによってマインド・コントロールされていた少年たちにとっては、それは「神の言葉」かと錯覚されるほどであった。

そんな体験をしてきた私が五十年経って老境に入った。その立場から日本の著名な歴史上の人物の辞世の歌を見ると、どれも気負いがありすぎるように思えてならない。きわだって話題になってきたその死と辞世の歌とがドラマチックな意味合いを高めていくことと、自然な死を安らかに迎え入れていく人の「どうもありがとう」と最後につぶやいていく締めくくり方とは、天と地の開きがあるように思えてきた。

敗戦で平和が戻ってきて文学をやる気になった私が、いくらか冷めた眼で受け取った辞世の歌が二つ三つあった。

身はたとひ武蔵の野辺に朽ちぬとも
留め置かまし大和魂

幕府の禁を犯した罪で処刑された吉田松陰の歌で、ときに三十歳、国の一大事に当面してひたむきに攘夷のために奔走した激しい気概を秘めている。

さっき私が触れた戦時中の特攻隊員たちの歌も、この流れを引きついでいた。さらに言えば、戦後の昭和四十五年（一九七〇）に市ヶ谷の自衛隊で割腹自殺した三島由紀夫の「散るをいとふ世にも人にもさきがけて　散るこそ花と吹く小夜嵐」もその殉教の美意識において一つだった。

かれは四十六歳。老いを知らぬ人というより老いを極度に恐怖した精神のダンディであった。死が向うから近づいてくる年齢ではなく、美意識の体現のためにみずから死を演じなければならなかったから、つぎの豊臣秀吉の辞世の歌に近づくことができなかったのも致し方あるまい。

露とをち露と消へにしわが身かな
浪速（なには）のことは夢のまた夢

こういうところに行ってしまった秀吉の思いに私は親しみさえおぼえる。権力の頂点に立ちながら、すべてが夢のように空しいと気づかされたのも「死からの贈りもの」だろう。

あれだけ傲慢に振舞って位人臣を極めたのに、死を前にするとこの世の栄華も露のようにあっけなく消える。その自覚が人間のものであった。六十三歳という老いによ

る死が、この諦らめの境地を生んだというべきだろう。

しかし立場がちがうと、老いが素直な辞世を生み落さないこともある。それが秀吉に切腹を命じられた茶人千利休の辞世だった。「わび」とか「さび」とかは無私無欲の状態を言うものと思っていた私は、権力者から死を要求されたにしろ、それに対してこんな怒りを叩きつけることになるかと仰天したほどだ。

人生七十　力囲希咄（りきいきとつ）　わがこの宝剣
祖仏共に殺す　提（ひっさぐ）るわが得具足（えぐそく）の一太刀
いまこの時ぞ天に抛（なげう）つ

刀を差している武士でも茶室に入るときはそれを身から離すという基本の心得を思うと、辞世の詩に刀が二ヵ所も出て来るのは了解しにくい。明澄とも悟りの境地からもはなはだ遠い。

秀吉が俗物ならそれと向き合ってきた利休もまぎれもなく世俗性の強い男であった。信長から秀吉へ二代の茶頭となって仕えたこの茶人も政治の空気が直感でわかるような人だったから、秀吉との関係はそのスタートのときから危険性をはらんでいた。

権力者が意地きたないのはそういうものだとすぐに理解できるが、茶人がそうだと

首をかしげたくなる。茶人を宗教家に置きかえることもできよう。世の中にむかしからザラにある話である。

いろいろな条件が重なって秀吉の勘気にふれ、天正十九年（一五九一）二月、堺に蟄居を命ぜられ、同月二十八日、三千人の兵に囲まれたなかで最後の茶会を催したあと切腹した。その首は京に運ばれ、一条戻橋で曝された。七十の老茶人のそういう最期とこの辞世の詩は見合っているが、茶道にとってもっとも不似合いなものが血なまぐささである。

これ一篇で利休の全人格が見えてくる。私はこんな老い方を受け入れたくない。むしろ奢りたかぶってきた秀吉が死を目前にして未熟なわが子秀頼を気づかって、五大老に遺書をしたためた人間臭さの方が格段に好きである。老いはもろい。プライドもなにあったものではない。

返すがへす秀頼事たのみ申し候、五人の衆たのみ申すべく候、いさい五人の者に申しわたし候、なごりおしく候。

秀頼事なりたち候やうに、このかきつけ候衆を、しんたのみ申す、なに事もこのほかには、思ひのこすことなく候。かしく。

秀吉御判

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com